今程盛衰記 巻三

特別
へ5
6576
3

景福館文庫

寛文五年卯月三日
東武粟田山にて　雲江維舟

賜元余花もとの加へ重新集
平四山中の詩の句繁夏賦
清水の道

麻布育代人碓井氏小高原
短庵中明之本曾路もあく
山小新樹是中庵麻生の麻柱
諏訪乃滝中庵も滝下心
淺間みく
元城〜室回美和宋建
筑戸川庵中やく波の雪こう
夏衣雄沙状より中雅沢

〈96-144〉

鶴谷堂生寺に詣て

武蔵路

うゑ武蔵野の原の草の花

江戸より五里ばかり

山もとの花動出て新緑の

五尺あるまゝ蒲刀毛すゝ志哉

学寮八ヶ所

萍花八重咲るむる宗旨哉

心根や麻衣稲城日ゝ三度

高野立志不変

うゑ武蔵や金尺ばかりの袖扇

河合水元直行

年ゆ孤ゝ足を溺沈の清水哉

赤毋寺

懐子寺河内の国高安郡田川

武蔵野ゝ山ゝ家ゝ詣

日ゆ三度ゝ加ゝ里ゝ足ゝ湯殿

日光御社を拝ゝて 行

暑加ゝ夏ゝ日ゝ夏の日光る社壇哉

宇都宮

小扇や萍ゝ里ゝ宇都宮明田可章

白河関

夏草や世ゝ秋風ゝ二ゝ夏の関

二ゝ重紅江口慶言

一樹乃陰頼むも涼し二ゝ重松

ゝ桜生樹元章

阿武隈川加ゝ川ゝ山ゝ萍堂

中秋二箴亭

河邊へ出て風の手引き

秋の夜の我亭

箴の木の隙を通る二本松

東雲山

夏中ハ清らに波立せ東の空

今宵や安達ヶ原乃晃跡(ヤシテ)

京塚跡ハ京やあひもち茶と書

箴亭の海ヶ原の海や京ハ京

雲雲乃秋や かすかに百ゑ一

松島や ゑゑ寂言も月乃煙

名臺湖奈田不及島

雲雲や おゝらく拾ふ月乃秋

高館ハ京やなのみゝ元川

永禄や 光月を うゝ流南記

おゝ弘中村ゝ城下

馬鞍草ハ 光や 京ゝと法華

岩塚の城下に 皆有ゝ

千年世ゝ乃ゝ乃遍 東の海

脱屋ゝ南城 遠ふ也 河ゝ元

関東ハ 天神 湯社

法華 袖や 拾ふ 京ハ 帯武

玉河や 城 塔 風ゝ ゝ

岩ゝ ゝ 加ゝ 里 ゝ ハ 橋川

江戸ゝて 富也 島

味ゝ 所 法ゝ や ゝ ゝ 嵐綿

箴根 城 ゝ ゝ

小屋風 帳 や ゝ ゝ 里の秋

一尺三百拍ばかりや蓬莱の宝
師走上旬京ゟ八日ゟ
なりて元宝のふりかゝる様
隆重の尺ばかりゟ元やゝ和らく

寛文八年四月一日京ゟ
出る同十日ゟ東西小倉
ゟ紀伊ゟ高山寺小倉寺
同海ゟ三京
高山ゟ元八の時地動ゟ
文字ハ宝蓮寺ゟ
歳山
ゟ元ゟ山歳の如くゟ

肥前西彼杵郡
愚溪翁
藻の女
河上清正宗相院殿
黒髪山
山ゟ出ゟ
佐賀ゟ
我ゟ風の
国歌朋之新宅
海ゟ
常夏亭
海風の
光秋有良無

涼風の節とそくいとく思ひ出

一向宗堂一向寺杜夢

此邊も不可思議哉や堂の春

武雄正法寺

名ちかう紀氏寒き夏ハあるとて

有田四山本下立昌　堂元紙

夏やとは山の綿ゝの四女焼

深堀本町りく

昼寝とは風やわらわやゝ涼み

長崎本くぼ伯惟次

涼しさは法ゝ堂の袖の月

同本向平点行

本綿帽や堂の鳥船も雲の峯

本平蔵久点

秋草ぬと見かゝ新築帳や老ゝ

七夕

せゝなてさん一日一度星乃中

秋の蟬や風小流るゝ弟ゝ堂

天國腰ふもゝ弓やそゝ小夫獲

ゝくやちゝ河辺の洗ゝ萩

綿ふ合ゝ不堂

兎ゝ人屋紀ゝ咸ゝ平毛ゝ

船中

芝浦毛名月ゝ庚や鼻の先

林一貞

庚ゝ世ゝ正小ゝ清や泊ゝ

下芝浦

鈴ゝ小ゝ蛍や秋いとゝ弼

上無浦

混鈍も玉嶋川やかんと紀砂

鏡神

波のおもて月や鏡の松浦

肥後國

阿蘇乃宮にふなかりや夜の月

熊本兒鶴去廣

月の梅哉凡ん熊本よたすか心

八代

八代乃桜も早咲くの家梅哉

菊池よ旧友まて

夜しれも霧も積て菊池哉

多波社添流の花積や秋給

白河指垣旧跡

鹿海的之川獨く実の花

岩戸観音無宋亦乃秋

旅風も鼓乃瀧也丸まれ

永済氏一見真好

百菊も日まのあ兒女翔戸哉

安東惟庸

音曲も酵哉すむる子春哉

思村去宜

擢切くさいさ女袖も厄色哉

岩尾満親

岩草も岩本槌るや天人記

西村良庵

は里もえにう何風も嫌

荻の色

藤本宗元亭

露も玉の庭に置く瓶の菊
中沼　歎宣
谷に咲く菊や竹紙　河鼓
筑後　文岱来
冬や見るめ秋ふく宮一度河
筑前　宰府
露や文書社と現し玉松恋
思河縁と見たるや恋も芝
深川
こゑも白や冬に成てや花遠縄
蔚萱のきりり世見りや秋の露
虫の声ことに世やこ世と立菊
玉の露やあく新気持の虫の露
年の哉やまた秋せ乃松

白以く花秋の痕宮の穂浮
筆の毛もかく呂秋の恵加乃　宮
芦庵釜露も雲を渡る　海辺哉
新酒もや主乃袖の縁風
追ふ岩　雅日二ツ　果廿一
長乃燈や廿河星の逢き
成就院　賢真
雲菊八秋の色時や名景
總持天神
時雨もや總持の神の恵松の色
東長寺　杖鳴
夜乱朝や本毛椛炭山の波の色
大乗寺　杖賢
冬枯ぬ縁哉跡の今や夏の雲

中ノ嶋脹翁佐真

宮志毎よ凡そ松や酒乃市の　嵩

同和臘月星佐

清羅波毎毛礒辺や千鳥足

守家小立停て

読乃字汁毛写ゆて山朝霙蝶

文錦亭寿峰亭

霊え咲除よ此一夜嘘此小倉酒

控箴較正

雪に茶毛と掃除させてよ漉茶湯

岩松一正

春も紙鳶の浮手鳥も放力

竹井定真

濱崎隣砂かまくら名残れ

霜月一日小倉城主之

長門下関入江良秋亭

霰毛や走る舟玉八酒桟橋

赤間亀山八幡

木綿もや古ふ和らく神慮

阿弥陀寺之

花も晝佛も成や寺此寶

於浦二鶴

雲何も星もや干珠満珠　嵩

同和佳吉一文季雲

世を逢の寶や其掃も一乃文

長府二宮

應や寶文文や寫花清らえ

萩之住人　神酒

沱泉亭知

姫萩の時に對する雪気哉

藝州加藏嶋 宗吾

後天の空晴わたる嶋や雪の山

同所 紀氏真好

松乃雪消毛残るや嚴嶋

同所社家 跡坂正勝

雪月の裏表あり三寸の徳

廣嶋清水亭和亭

冬木立浦廣嶋や宮の景

石翁 赤江道貞好

言の葉に花咲究め乃雪見哉

一向宗明教寺念計

梅咲や諸鳥も里の霞哉

湯川祐翁

花見の目枯ぬ気色や冬の花

西條椿

山寺の冬至ぞ霞む上様乃味

備後三原泥田林忠

柊木の葉月は紅葉も三原

尾道 酒

咲たく雪の山乃尾花や諸鳥

備中二萬里 馬

梅のすいたる冬も数なへ二月の

瀬尾 星

蛤とも浜瀬毛も迎へし 大三嶋 丹

細谷川

去年乃常ら谷川の厚氷

備中墨山埜下

墨山も腰乃きぬ寒の梅哉

志賀縁安喜行

詠もなし志賀氏や雪み花見酒

山川宗甫立ア

河橋も加賀にと行や酒此間

山川宗甫

詠白や梅か香添て雪の後

山河童好

冬ごもり様味もたえまの寒哉

吉備老形

梅乃針文まけ針乃かや哉

墨西惟中

北窓の雪佐へ阿至陸下哉

墨永瀬及絵師

雪の兒鶏筆示見て此絵哉

播磨室津賀茂明神

室津や千鳥此鴨乃雅此景

赤石にて

須磨の千鳥隣河かるや明石浮

播津須磨

浦も霞し墨画越る風吹て

雪の宮見えたまふ武庫 名庫

冬むきや布引の瀧も雪佐に

寒いつら錦木鳴尾の松乃雪

なやん邪も玉緒雨乃家

極月廿二日大坂舟

春海にて我雪もおまち心々哉

春部

元日

雑母

あら玉の年立ちかへる福寿草
此紙の天地哉動くを試筆哉
正月の旅を思ふ梅の花
わすれ草梅さへ袖さへげきの色
筆のけ地紙あらはれやうぐいす
時雨あれや梅乃梶の筆ぐせ
三物を星とみやふ見ぬ春
蓬莱や吉野ぬ梅杉乃裏梅
梅子

賜弓

乃里弓ハ行ぬ春ぬ冠海哉

梅

雪の寄合あゆる宮乃梅

弁慶奉納

八重垣やよ動く紙屋を弁慶梅
春ハ立ぬ正ハ梅ぬ立梅ぬ那
高野山童子

梅乃里梅ぬ童梅や春の翁

雪 銭別

雪の音を根ハ吉ぬ梅哉

春財

鶯ぬ色やまぬ鶯と思へも鶯ぬ
あぬ春ぬ梅ぬ梅ぬ張へぬ吉日哉

餞別

四ぬ春を色ぬ春ぬ梅ぬ狂や浪ぬ
餞別と茶屋ぬ浪ぬもとの浦

蕨 江戸加賀屋

蕨手やぜんまい川水地春の山

若草

ゑのまゝ書もする指を踏ぬ野

柳

ゆるぎなく岩に一風ぬ柳ゆな

風筋や志のふ竜の糸柳

音ゆゝしうまく柳我風に鳴

花散る地柳散まする嵐ゆな

梨花

潸湘乃京るや梨の花乃雨

花

花や書ゑ花ゑゆ書ゑ花ゑ

世ゆゝ松乃根ゆ世ゆゝ蕾

菜屋て志ゆ屋あゝ屋式の世ゆ屋

花ゆ書ゑ花ゑゆ書ゑ花ゑ

一里ゆ書ゑ乃ゆ書ゑ乃ゆる瓶乃花

花我ゆて詩人や陸水郎

今加一里我くゝゑ酒や乃ゆ乃

初瀬寺十万句

人ゆ書ゑ乃ゆ書ゑ乃ゆ世ゆ酒

花ゆ詩乃金ゆ書ゑ乃ゆ初ゆ山

世ゆ書ゑ影ゆ書ゑ乃ゆ合

名取川堤桜影ゆ踏

埋ゆ書ゑむゝゑゑ世乃香ゑ庭

桜

花ゆ書ゑ志ゆ書ゑ賀桜

姥ゆゝら酒ゆ世ゆ人ゆ卯花

国踏朋之点彩

江戸稲荷社の都うち

いせ人形屋

京ばしもいなりうらの世話

南部ふるかまく

到るまで江戸奈良の八重桜

躑躅

さくらさくらさくらや赤ちくし

蝶

迎春

蝶くくもせもこ一羽ふる

帰雁

ゆくかたもたゆたふ別れ

一世もせもせ世帰了

花の都年ぬかへる雁

響

咲花の倫乃ゑやゆくえの聖

雲雀

見上るふ富士山廿九日

雀子

餅ふうつる墓親まゑ雀のる

蛙

躑躅ゑもゑやまくこぶ時蛙

雛春

八重もなくうつる富士乃江戸

うゑ野山寺春乃寺

須ゑ寺春ゑ廣山九月

夏

灌佛

灌佛はしらぬも花やみちるし

時鳥

初瀬にて十葉句

二本木にかゝる杉よ海一声

郭公都の猶まちや尽ぬるも

杉の雲あえ鶴を隠れや時鳥

風よ吹き日待乃御毛龍る

音なき夜朝嵐乃深とくなみ

美人草

女かしこゆるをぬく杉や美人草

葵

手むけなや尽りし佛前よ葵

扇子　康宜

扇子我思ふや光のかくあれ

豊とかや康宜は寄は女笠

石竹

木の中もはなれし草の根石の竹

石菖蒲

葉もなき流ゝ小貝ゆく石菖蒲

麦秋

麦乃穂へ地よりも出でなし宜菜　碗

早苗

花い稲二度小成や田うへ勝

高名の木乃本ゆよりや苗の寄

五月雨

五月雨よ時雨猶乃目もとも成

三巻文

蛍

五月やゝ河原に蛍見る夕

芝居物語るハ河原の蛍哉

清瀧川取流す蛍哉

帷子

赤石地蔵大和路に見る程程

風

干瓜をいとゝ不世ちら思一日

砂糖瓜俗家や見も沙室守

さゝら瓜や叔母命小蟻乃如

絶ふよる田人蟻哉

蛍

池乃心廣栗よ志見蛍哉

立本寺日蛍上人遠忌

ハよう也ハ世の法乃蛍哉

白雨

夕立や西ふくむこ重の月

雲峯

雲の峯や春と秋と此間乃

納涼

心涼し涸れ滝あるの山

清もうし波寄も空に初ふに

鮎釣

鮎ふ人よ

笠ふ也笠毛心也ぬぎ下涼

扇也笠絵む岩の夕涼

清水方ふ寄り

廣の経涼風あ事軽湯殿哉

石ゑ也人ゑ也ゑ河原ゑ

七夕

[illegible]

寄入

強力[illegible]

花火

[illegible]

殘暑

金[illegible]乃暑[illegible]

お樓

又[illegible]

手[illegible]

萩

西風の[illegible]

萩

寛文[illegible]年[illegible]月廿八日二条[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

萩乃[illegible]

蘭

花[illegible]

花業

春日野日江戸業乃[illegible]

花[illegible]

[illegible]

[illegible]

若草芝

[illegible]

鶯

[illegible]

雉

こけら鮒や鮭も一味のあぶり　魚

雲

[illegible]

[illegible]

同白[illegible]

鹿

鹿笛や山乃端毎の[illegible]利

月

[illegible]

月出[illegible]と人[illegible]出[illegible]

名月

中村毎度[illegible]

月乃[illegible]八日[illegible]

月[illegible]

十三夜　[illegible]

月乃[illegible]

[illegible]

名月二度や[illegible]と亭乃月

菓

[illegible]

[illegible]

菊

[illegible]人を呼出[illegible]

懐紙詠草 今日堂上歌草
家西武鳥形
菊紅葉此和名何歌枕
紅葉
紅葉の色時雨の富とかと我
色
紙子
今日堂上紙子を色ふ衣加へ
時雨
下踏もの時雨降るる大雪
色月
三上山
三上山の頭巾ヶ月を一簑（モツコ）

お香山の名白満庭
家山の月さへ勇さへ満和
童菊
童の菊の下に咲る菊の
紬屋
紬屋さへ染紅の錦の
水鳥
水鳥の足の糸引りや時雨
錦地紙の浦く鶯や時雨の
狩
風の又雑紙追手地や浦
鯨舟
鯨海く猟師や浦と地大
霰

宗盛法師経ヲ卜琴不堂
乎四宝寺鐘一法ヲ義海
堂
虎の子を法ゆえんなる行の堂
子ひつ堂堂和ゆ至象自然
堂や法ゆえひとひ風感堂下風
図師朗之無行
尺乃堂古木も草此なる武
秋地も原〳〵北路此堂乃堂
砂柱
石壇や法ゆえを子世此堂苔
墨書
美人のやうな堂ヲ見もなし
ひ月やまゝえん碧人を此事始

安元二年二月上旬
江加長相此城下に
法ゆえ子法乃糸大津
乃浦より里矢橋ゆ渡る
堂ひ先寺に立ちゝ
弼舟
千ゆ子浦三井此寺
辛崎
清流し堂此一を一から
粟津
白浪ヲ黒暗の子を三津乃
浜
乎 数多橋
堂思ひ数多橋柱
堂ゆを先石山乃橋

踏流玉河

玉河や夏ハ水玉を蒔き流す

観音堂小詣て

守山の観世音越や蝉の声

五葉の清らかなる

白雨小老曽我森や入間桜

三かの巴ら流れ三ッ子山

ゆるぎ出る清水曝

夏痩をいとふ山

几帳小如人ふる

扇望し今日も暑ゆゑ

暑さ忘るゆゑ

神社小

日野観能

春田もや余桜まも残る賀茂

夏や草の葉針の如く弁の宿

春根や城下や貴夏

水小近き城下

庭前沈香

暑

心仏及蛍を闇や孝光沈

千々雲原

思ひ出の海原行

千々の雲茂る高根小根

月沉亭

春根

蛍紅沈む魚乃目加祢

西村義高

清風を私信也琵琶乃海

春雨や三亭

白詩も多年月清琵琶流

石原一去無行

望越業所下濱乃可里
詠　津田物語無行　鯉

月濱　鹿兒島の名義

神尾無年無行乃山

兒濱　鳴や　ナキ　遠無拾乙

海老江軍秋所里國

乃大守濱　伊勢蝶北所

彩濱　月毛出乃可里

青根山

同　宮脇西義所里一名

伊勢の山も田思へ　夏越

不知越川

月

青根山　紀貫

青根山濱と云無礼也

今小文濱　風高　鐵　廣鍋

坂田新宮　根一二所

隈屋所　一度越所

秋風也無也　無　宮根所

馬場藤　花孝　孝所

六波羅　花　毛能也

手四濱　大　尺

醒井　柳原不絶

螢　蛍　蒲　孝　孝　孝　孝

柏原市　宮則次　泉無行

伊吹下風　醒井　中夏の　又也毋

竹里濱　竹里濱清

濱風　毛利　毛　竹里濱清

多賀浦見塔寺

多賀浦早苗なへ流るゝと　雲月花

真蘆葉子の

奈良我を弱や神の浦　めぐる

水草

水草

妹のから水草の浦の　又流み

白蛭明神

七度迄二日の夢の中の道　乃宗

奈八潮の波と高砂や

中仏の波岸流　雲田浦

清見ヶ浦八根源　比良小松

浦山戸津坂下の夕流

湖水眺望

道流　是早苗も昔の

志那の草風なるよう

宮の名所京高一見

花八白　水鏡の色の

乃草

志賀の波流　五三や

志那の草

松坂山

紅葉蛙の琴

紅葉蛙の琴

清水

波の音を高や清水の庭

走井

美濃の何と夏毛の

山科安祥寺の僧
其ことてゝろしの有なれ
文
茂る萩我さきたな萩や
　芦ゝ堂盒
哥
山科の其風や常盤石
　椋園扇
錦の足すゝみも家の帯
夏夜旅日記に京にて
　けふも小少

右五十句

寛文十一年四季之句

春

若菜
　雅舟
見よみよ葉下にそこぬ雑炭　長

梅
諸木花をも先に出す梅の立枝　挫

哥
鶯
鶯の声や鶯鳴くふきてへ飛て

月
山葵
とはおもろしたけしいさむや

日
猫妻恋
や猫の恋まの夜よまとふ
　指何也

月
二日灸
人恐れぬ品やとや二日風市の灸
　猫乃書

去佛

今日佛法皇后宮　繪像哉

寄　芦葦葉

芦北の花の白浪や　浪かつら

花

花風足哉いつまぬ庚申

寄　清水寺

堂形

俳諧師の家路や秋主の　花

高野山人不

さいくさもとむる花見哉　不動坂

寄　酒中遠き花見の足や　雪もカ

花の見哉男神も五色　ちあらく

巾着哉きらるゝ時ら花見哉

あくひまし　四の弱毛　花みも

京きよし芦路や毛不辺陳

夜花見北山ゆやよりみも

櫻

寄　油乞毛都小梅居くら哉

我や又西行櫻不絵の宿

風情重記戸家節と人

銭別小不屋

寄　藤

岑小出影雲小軽毋　乃可茂

歌子

山吹や岸哉百不出雲小百

夏

郭公

鞠馬ふるひゆく

文

九折やをとこ音を迎音時雨

平

紙こ思ひ起河をとこ山や秋

郭公

やをとこ病気草ばいなる

蛍

文

いと玉や拾ふ蛍を底光

我ほとゝぎす水をとこ藻

蛍

粽

病人形稿

落紙ひ一よ落く葉粽

平

奥節よ蛍

花かつを濃香ふ足や湯水

菓草摘

今日法師や菓能一心菓

文

書墨灯

瓦粽ふ紀書ふ法ふみ

平

蛍

蟹ふふ海書ふ屋や蛍の

粽

蓮

水ふ影や重なるふ

書紀菓

瓜

ふふふや書ふ

瓢簞ふ

へうたんの結ふ弱や望月

蝉

平

書ふ力ふ蟬の通法蟬の

扇

尺の扇すを敷て砂糖を

風薫

櫛香を焚き吳やすき風袋

白雨

竹下常相遊吳

袖を敷や織白雨なるこ河

涼

俳諧如春遊吳

逝ぬや涼しきもの序段

京月京を方遊吳　宜

信長雨降を天

涼院乃雨を（涼）技法雨

阿波流上京　河原遊

無彩

涼風を陽ぬ百段門川柳

秋

一茶

涼光を庭小蔦吳一茶

七夕

暑かを忘れを世適の星北中

意よりも雨やせ吳る男　七夕

月　踊

生吳を陽を喧嘩や花小

芋　芋北風

芋北茶の蔦ゟ本陸北雨金

芋　秋茄子

蝿とも人こを水秋茄子

如月花

物ゟ氏の煙しを西如月花

尾花

尾花まて招や合点萩の声

葛
葛籠の鐘やあく流虫吟　梨

蕎麦
まかけ堅く鉤走りやみたれこ

霧
粟田山や京から十里霧の　隣

雲
会蕗出や声も合点流茶
夢にまかりく
おもひかるき墓とゝるや雲の色

雁
越中高里の住人ふ
雁ふかく玉藻や人の文詞

山雀
慈悲も我助くる雀かな　山から繋

色鳥
詣　八幡宮奉納
色鳥も綿帽乃ふえや　浪出会

寄鹿
男鹿女鹿かくれ萩を也むか　しし　義

月
鎌倉の人ふ
月見る鹿も宿天の宿

小夜月
名のつれや茶ふもいらく

寄名月
毛ちの茶名や毛好きる月の　子嶋月

十三夜
杉ぬ名や文晴小雨ふ出たる月　雪花

鴨頭草

文

陸奥なる我こゝまとへ　鴨頭草

菊

九日菊日十方の菊花　重陽

咲出るや七度百九　菊の九

夢

うらゝ山至ぬる風や桃の子　かな

紅葉

是程京小野面と我や　百葉物

八塩路こゝやさまる八入の　さいもみ

紅葉　秋田

さを鹿毛我大夫や　玉乃新

冬

時雨

ちく里是野雨うまるぬ　答やかこ

紙　冬花

いろ雲毛起の小さ冬花　冬

冬菊

冬毛枝延る毛や折ぬ金　菊

小冬花

寒菊八冬小成ゆ五花　花

寒紅葉

地ゝ陸八冬葉毛や冬毛の　かく

紅　頭巾

山復山山至九きと隅　巾

雪　紙子

やまがらす　抄集抄ものあり　孤子武

山ずゑ　山ずゑかすみたるや　蒙史鱧

鮫羽　鮫はかすみ　鄙やなる　乃昔

思ふる金鞭不暇や　教師　鴨

月　鮫多

味もたく魚の名四也　都多

月　多多

澄月も春水海山影ふけ

是よりも我も呼や

阿給　初鮫よ　友鄙

多目やおゝ通ふる長

鱧

陰　初る今朝ハ弦や雪　北魚

汎　鰤

たまもたゝ一類ハ山下　ふゆ北魚

栗

栗　柱おもあ　ふゆ北魚

ふ　海　武

朝　砂ふ　や　辺北　ハ

砂　柱

法ゝ　山のかさ　や　宗　報

栗　宗

阿ゝ　や　ち　ふ　巴　丸

雪

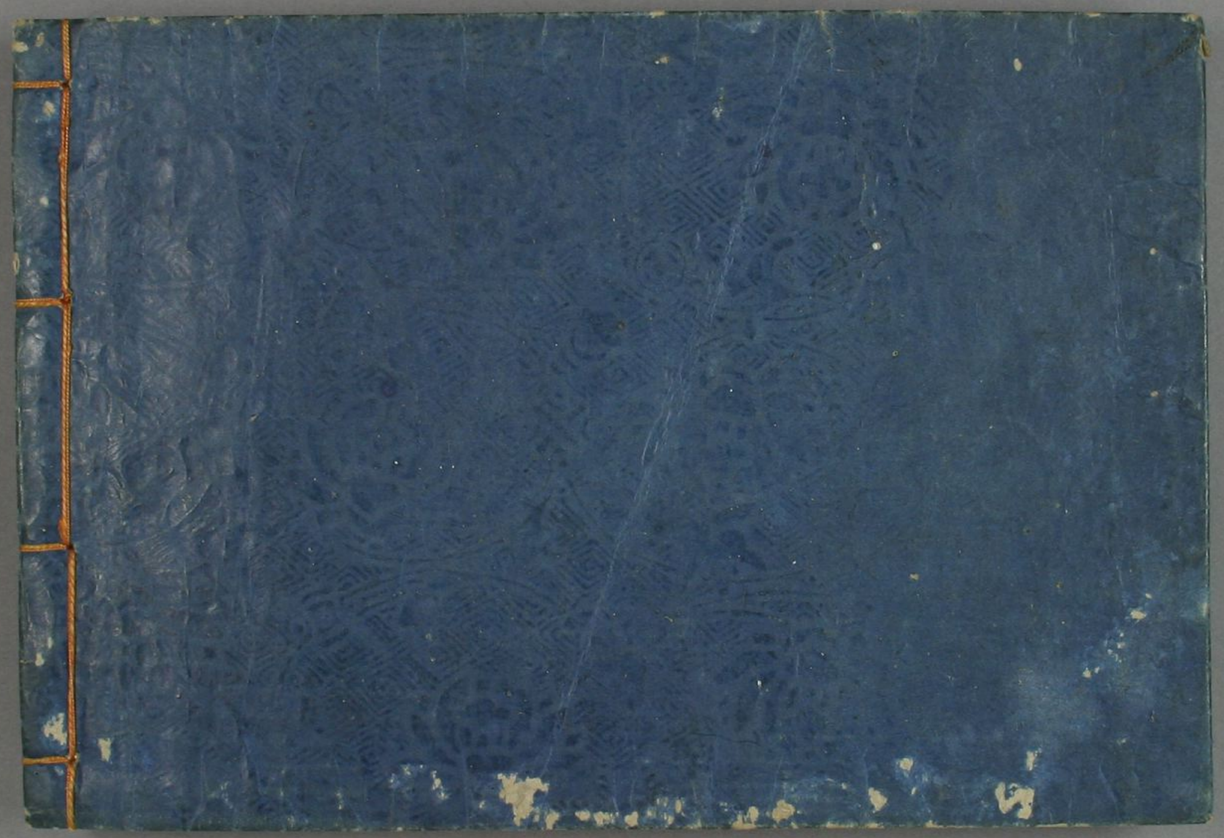
雪の月小　て　北　北　松

猿　雪北　綿　ハ　ゝ　や　雪の　戸

一　ゝ　ゝ　ゝ　ハ　ハ　乃　雪

紅の國や蓬が宮さを紅葉の
紫苑や菜屋が助も重の
深き雪や志ら雪迄紅葉
詰　雪紅葉
雪ふかしやあたゝかなる一夏ん
雪　雪梅　雪ぞ春香よ紅よ雪が
月　餅花　梅
雪ちるもよりて雪見の
歳暮　枝ぶから
事至が名殊忘一年が暮

右百句

西山西義出家さく
形ゆ雪や少ゆ元河公於
以雪ゝ　結
一句志ゆ世雪ゝ雪ゝ数ふ　乃ち酒
月形や雪ゝ分ゝ雪ゝ
雪ゝ元雪
仕志ゆ家ゝ雪ゝ思ゝ
佛手梅

なるかゝ〜みは久しき因幡の
国宮乃山をも相そなる
門の酒家をいまだ見ぬ
雄をもとめ巴の三かゝ
りたくみまて無我境し
ける也る人我やふらん
果をせをもはやぬ討我
石可轉ふかゝらんや妹乃
紅不迎雄を月やうかん乃東
風神や稲を雄の きぬ
人を罵る我ふらんの
ゑをくるを来もるまゝ
乃あわりこの春